



寝床屋

の

無料配布

・えんむすび

……

3

「ふむ、近頃具合が悪いことはないかね？」

「あら……」

かさついた手のひらを見た辻占いの言葉に、つい最近眉を落としたと見える新妻らしき女が思い当たったように言葉を飲み込む。

「ナニ、そう深刻なモノじゃあない。すっかり休むのが予防になる。さすれば子宝も遠からず授かるというものだ」

福々とした顔でにっこりと微笑むと、女は安堵したような顔で笑った。

しきりとお辞儀をしながら遠ざかる女を見送っていると、

「上手い商売してるじゃアねえか」

と、背後から剣呑な声が出た。

「うわっ！ アンタ、いつからそこにいたんです？ 脅かさねエてくださいよ」

驚いて振り返れば、鬚が崩れた博徒かゴロツキと言わんばかりの風体の男が、ニヤ

ニヤと人の悪い笑みを浮かべて立っていた。あまりにびっくりしすぎて、辻占の恰好から狸の耳としつぽが飛び出す。

「いつからじゃねエヨ。まあ、タヌキ風情が生意気にインチキ占いをペラペラと」

小さな神社が立つ川沿いの道端を拝借して、ちんまりと店を開いている。ゴロツキは川沿いをブラブラ歩いてきたものか。ともかく、面倒なヤツに見つかったものだ。

「朧さん、インチキなんて、よしとくれ。外聞ア悪い」

こいつには散々、幾らもない鑑定料を譲り取られてきたのだ。

「なんだナ、インチキをインチキと言って何が悪い」

その言葉には悔しいが言い返せない。インチキなのは本当だ。誰かに師事したこともないし、笹竹も算木も読めない。そもそもが化け狸であつて、ヒトでもない。それでも、誰かのありもしない不安を煽ったことはない。鑑定の結果にいい加減なものを売りつけたことも、鑑定料をふっかけたことすらないのだ。非常に良心的に、謙虚に、ひっそりと、人の暮らす町に紛れ込んで日々の糊口を凌いでいる妖なのだ。

一方、この朧も実はヒトではない。猫又である。ただの猫であつた時分から乱暴者で、ここいら一帯で幅を利かせていたドラ猫だ。ただの猫や犬など歯牙にもかけない。

ヒトだろうと妖だろうと関係なく、気に食わなければ猫とも思えぬ声で威嚇し、噛みついて、引っ掻く。

憎まれっ子世に憚ると言うが、柰ほどの嫌われ者もいるまい。それが長寿を越えて世の摂理の外へ出てしまったのだから、鬼に金棒、獅子に鱭ひれ、龍に翼を与えたがごとし。余計に手に負えない。

新参の妖の癖に、遙か昔から妖であった存在に対しても、遠慮なんてものは微塵もない。しつぽが二股に割れる前から、割れた後も、人も妖も関係なく、我が物顔で振る舞っている。お蔭で泣かされた者たちの涙で、大川の水位が上がったとか、上がらなかつたとか。

「それとも、ここで大声で呼ばわってやろうか？ インチキだとサ」

凄んだ笑みを息が掛かるほどの間近で見せられる恐怖は、千畳敷なんて言われる夕又キ自慢のナニも縮み上がるうと言うモノだ。

「か…、勘弁してくださいよ」

そう言いながら、これは今日の上がりあがりを全部取られる流れかと落胆する。コツコツ貯めた金に今日の分を足せば、溜めがちな家賃を綺麗さっぱりとはいかないが、ひと

月分は払って、更には一杯飲むくらいの余裕が出来たのに。

自分を含めて妖ばかりが住む裏長屋の大家は年経たカワウソだ。そのカワウソに惚れて、押し掛けて無理矢理住み着いた座敷童が女房役よろしく、嫌味をたっぷり言うことだろう。その座敷童も怖いが、目の前の奎はもつと怖い。

「勘弁しろだあ？」

この猫又の狡いところは、金を出せとは一言も言わないところだ。それでも、押し出してくる空気で金を出せば考えてやらなくもない、とハッキリ言ってくるのだ。

「出鱈目をベラベラしゃべって金を巻き上げるお前が、勘弁しろも厚かましいぜ。俺ア、悪い奴にうっかりひつかかっている奴らを心配してやってんだ。むしろ、他の奴らの方が、そんなお前に勘弁してくれ、と書いてエンじゃアねえのか？ どうなんだエ？ エエ？ 俺がなんぞ間違ったことでもしたかえ？」

ずいずいずい、と猫又が今にも押し潰しそうな威圧感を醸しながら、のし掛かるように迫る。化け狸は逃げるようにふくよかな身体を精一杯縮ませる。

怖くて怖くて、蝦蟇ガマでもないのに、油汗がダラダラと走り出る。

もう限界だ。化け狸は懐の金を差し出す腹を決めた。せめて殴られないと良いなあ

……、と悲しく思う。金を差し出したからといって、そのまま見逃して貰えるわけではないのが、こいつの厄介なところだ。下手な対応をすれば強かに殴る蹴るの暴行を受けるハメになる。

「いい加減になされ」

凜として、物静かな怒りに満ちた声が出た。

「アア？」

と猫又が振り返って、ゲツ、と嫌悪に満ちた声を上げた。

目の前の小さな稲荷の前に、ひとりの男が立っていた。すこし吊り上がった目元だが、涼し気な切れ長の目に、通った鼻梁。細面に白い肌の端正な顔だ。しかし正確には人間ではない。狩衣を纏って、被った烏帽子の両脇から、真っ白な毛に覆われた耳が尖っている。稲荷社の神使、狐だ。その証拠に、鳥居の両脇に控える狛狐の片方が土台から消えていた。

かめのぞき

瓶覗の上品な薄い青の着物を翻して、稲荷社の石段を降りてくると、白い狐は猫又の襟首を汚らしいものでも摘むように指先で挟むと、まるで糸くずでも捨てるようにひよいと道の向こうに放った。

道端に投げ捨てられた猫又は、ふぎやつ、と驚いた声をあげたが、途中でくるりと宙返りをして、身軽に着地する。流星は元猫である。

「お前様は自分より弱いと見れば、すぐに居丈高に責めなさるが、如何なものかと思えまするぞ」

「俺が一番強エンだ。なにもおかしくはあんめエ」

猫又はそう勇ましい言葉を吐くが、化け狸でもわかるくらいに勢いが無い。さつきまでの、ちよつとでも反抗すれば押しつぶすか殴り飛ばさんばかりの圧力がないのだ。

「それはそれは」

それが判っているのか、狐の方が愉快さを隠さない顔で笑った。

「ああ、こやつには私から無益なちよつかいを出さぬようようく話しておきましょう。そなたはもうお行きなされ」

神使が優しく狸にそう言う。

「は、はい」

狸はそう言うのと、そそくさと荷物をまとめてその場を後にした。

「ちっ」

杵が忌々しいと言わんばかりの迫力で舌打ちする音が背後から聞こえて、ひゅつと肝が冷えたような感覚がする。

「おやおや、口先の威勢だけは相変わらずご立派でござりまするなあ」

そう言った狛狐の口調は朗らかなのに、化け狸の背中がぞおつと粟立った。どちらも、もう格が違う。経た年月も力も格段に違う神狐に、新参とは言え生前から力で幅を利かせていた乱暴者の揃い踏みでは、多少歳を取ったくらいの平凡な化け狸ごときが太刀打ちできる相手ではない。振り返ってはならない、と一心に走った。

「お前様は懲りるということをご存じないのでござりまするなあ」

「へエ、懲りるたア、なんのことだ」

一間ほど離れたところで、猫又と白狐が対峙する。杵は人の姿でありながら全身の毛を逆立てて威嚇を繰り返している。対する白狐はそんな猫又の威嚇など痛くも痒くもない、とでも言いたげに微笑みながら泰然と佇んで、最早一服の絵に描かれた若衆のように涼しげだ。

「ほう。よもやお判りにならないと申されるか」

「とんと、一向に」

柰の答えに白狐がふふつと笑うと、一本だけ立てた指をクルリと回す。途端に、柰の視界がグルン、と一回転した。急に動いた視界に体が追いつかず、柰はふつと浮遊感を感じたと思うと、背中から地面に落ちてしまう。目の前に広がった空を見つめて、何が起こったのか暫く判らずにいた。

が、状況を把握すると、素早く起き上がって、狐の神使を威嚇しながら睨みつけた。「おやおや、もう化けの皮が剥がれましたぞ。それ、四つ足でヒトのナリも醜く崩れて。他愛もないことにござりまするなあ」

馬鹿にしたように白狐がほっほっほ、と笑い声をあげる。

このやろう！ と怒鳴って、すっかりキジトラの毛皮を纏った猫の姿に戻った柰が、白狐に飛びかかかっていく。しかし、その突進は余裕たっぷりに躲された。力が乗ったままの勢いで躲された柰は、体を捻りながら軽々と着地したが、荒々しい喚き声をあげて、すっかり頭に血が上っているようだ。

まだまだ、と言いたげに猫又が飛びかかり、白狐が躲す。それが何度も、何度でも繰り返された。よく飽きないものだと思えるほどの時間が立つ頃には、流石に柰の体

はふらふらになり、飛びかかるところか、ヨタヨタと歩くのが精一杯で、ギラギラと
していた爪はすっかり隠れている。

一方の白狐の方は、息すら乱さず、まるでそよ風に吹かれた柳の葉のようにひらりと
と柔らかく空の攻撃をいなしていた。

今や柰はゼエゼエと肩で大きく息をしている。睨みつける目だけは光を失っていない
ものの、手足が傍から見てもブルブルと震えて、立っているのもやっとと言う具合
だった。

「やれやれ、ただ突っかかってくるだけとは、戯れにしてもなんの面白みもござりま
せぬ。まだ大した力も持たぬ貴方が、一番強いなんて、簡単に言うものではござりま
せぬよ」

向かってくる気配どころか、口を利く元気もないようだ。白狐はくるりと踵を返す。
と、どっと倒れる音がした。

物音に肩越しに振り返れば、柰が地面に倒れていた。

「おやおや。私の目の前で倒れるものかと言う気概は見事。しかし、今少し堪えが足
らなかつたようござりまするなあ」

神使は狩衣の袖で口元を隠し、忍び笑いを洩らした。そして、今度こそ稲荷社に戻ろうと、石段を登り始める。

「これはこれは、行き倒れとはかわいいそうに」

神使はおや、と思つて、再び後ろを振り返る。どうやら脇道から入つてきた人が、道に倒れ伏した柵を見つけたらしい。

「うむ、生きているようだ。息が切れておる。おお、腹もこんなに動いて」

中年と思しき男が、柵の口元に耳を当て、腹にそつと手を当てた。

「旦那様、そんな汚れた野良猫なぞかまわれては……」

身なりからするに、そこそこ裕福な商人と、その供で着いてきた手代のようだ。その手代が汚らわしいと言わんばかりの口調で言う。

「ほう。たしかあの者は、扇の地紙売りから大きな店を構えた商人でござりましたなあ」

歴史があるとは言え、小さな稲荷神社がこうして鎮守の森を含めて保つていられるのは、稲荷として祀られる神の格や、信仰ばかりではない。現実には賽銭以外にもなにくれと寄進して、神社を金銭面で支えてくれている氏子の存在があるからだ。

倒れた杵を氣遣う男こそ、氏子の中でもこの神社を支える代表と言っても過言ではなかった。

「旦那様！」

手代が悲鳴にも近い声をあげる。見れば、絹の羽織を脱いで、意識を失った杵をそつと包んで抱き上げているところだった。

「なんと奇特な」

普段、人間には姿が見えない神使は、遠慮なく興味深げな声を洩らす。これも目の前の主従には聞こえていない。

「重蔵や、お参りの間預かっていておくれ」

主人の言葉に、手代は明らかに嫌がって手を出すのを躊躇っていた。

「さあ、早く」

主人が布の塊を差し出して、受け取れと促すが手代はなかなか受け取らない。

「こんなところに倒れていた野良猫など、碌なものではありませんよ。そのまま放っておけばよろしいのに。なんなら、ここの社の縁の下にでも置いてゆけばよいのです。

ここにはかなりの金額を寄進いたしました。後で神主に言えば、よしなに取り計らっ

てくれるでしょう」

手代の言葉はなかなか興味深い。神使はこの顛末がどうなるか面白くなって、狛狐に戻るのも忘れて、やりとりを見ていた。

「野良猫、大変結構。重蔵、私たちも、いやサ、俺たちも同じような野良だったじゃアねエか。忘れたたア、言わせねエぜ」

主人が芝居がかった伝法な調子でそういった。

「旦那様……」

手代は、はっとした顔をして黙る。

「思えば、猫の面倒を見られるくれえにはなったんだなあ。ええ？　そうは思わねエか？」

主人がそう言って、笑う。はい、と手代が、涙の滲んだ小さな声で答え、主人が抱えていた猫又を包んだ羽織をそとと受け取った。

神使はお参りを続ける主従を興味深げに見守る。

「彼の者を遣わすべし」

託宣とも言うべき御神の言葉が、彼の脳裏に閃光のように光り輝く。

「それはそれは」

神使は自らが仕える主人の意志を聞いて、感心したように呟いた。

「暴れ獅子と言わずとも、それなりの驛馬かんばでござりまするぞ。性悪な猫又に鈴をお付けなさると？」

心配するような顔だが、そう言う目と口元が面白がっている笑みを隠し切れていない。

「なんと……、まこと見物でござりまするなあ」

余程面白かったのか、それまで冷静に保っていた人の顔がズルりと崩れて狐の顔が覗いた。

「宜しゅうござります。私がしつかりとかの仔猫に鈴をつけて参りましょうぞ」

白狐がくつくつと笑うあいだも、主従は本殿の前で頭を垂れて拝している。羽織に包まれた柶はピクリとも動かなかった。

これまで一度も飼われたこともなく、頼るものも庇護するものもなく、またそれを必要ともせず、そればかりか町中を我が物顔に振る舞って暴れていた普通の猫が、その生を終えた後、猫又になったばかりと言うところで、唯庇護され、愛玩される存在

になる皮肉の妙を、神使がしみじみと噛み締めていると、再び稲光が己を打ったような衝撃を感じて、しなければならぬことを思い出す。

「おや、私としたことが」

しゅるん、と縮むように姿がなくなつたと思うと、次の瞬間には台座から消えていた狛狐が再び定位置に戻る。

その脇を、主従がいそいそと通り抜けていった。狛狐の片割れがいなかったことも気付いていなかったようだ。

「やれやれ」

「咩、迂闊だぞ」

ほっと安堵の溜め息を吐くと、もう片方の狛狐が咎めてくる。堅物で四角四面の性格の神使、『阿』形だ。長年ここの神社の神使を共に務めている。

「それにしても、あの猫又を連れ帰ろうとは、物好きな。あのお方様も何をお考えなのか」

少し苛立たしそうに溜め息を吐く。

「さて」

「考えてもみる。あの猫又だぞ？ 家の中で大暴れ、建具も何もかもが台無しになり、結局は手に負えなくなつて捨てられるのが目に見えるようではないか」

最早、阿形が商人を心配しているのか、猫又を心配しているのか判らない。

ただのお人好しか、むしろ真面目だからなのか。阿形はそこが面白い。

「阿よ、そんなにあの猫又が心配でござりまするかな？」

「阿よ、そんなにあの猫又が心配でござりまするかな？」

「馬鹿を言うな。むしろあの商人の方を心配している」

「ほう。そなたがそれほどまでに人に関心を持つとは珍しいこともあったもの」

「阿形の言葉に虚を突かれたように、阿形が黙る。」

「ふむふむ。ナニ、皆まで申されずとも良い。あのお方様には吾がきつちりと鈴をつけましよう」と請け負うたのでござりまするが、どうしても心配でならぬとそなたが申すのであれば、仕方がござりませぬ。代わつて差し上げてでもよろしゅうござりまするぞ」

「阿よ、そんなにあの猫又が心配でござりまするかな？」

「お前が請け負つたなら、責任をもつて果たしてこい」

阿形はそう言って、ふん、と鼻を鳴らしてそっぽを向いた。それを吽形がにやにやと笑いながら眺める。

——その内、見に行くであろうな。

見かけたら存分にからかつてやろう、と吽形は心に決めた。

何か衝撃を受けたような気がして、ふわりとしていた意識が急に輪郭を伴って覚醒してくる。

——なんだ？

空は己を醒まさせたものが何なのかを探ろうとした。頭の片隅で今まで見ていたものが、こちらにいいよ、と手招きする。夢だったか、なんだったか。抜けでてみれば、それまで浸っていた場所が惜しいような、そうでもないような感覚だ。

戻ろうか、と思うと、また衝撃を感じた。

そして、今度は痛みも伴っている。

—— 一体なんなんだ。

はっと目を開けると、視界がぐらりと傾いている。一瞬見えたのは、大きな目をした人の赤子。そして己の体が放り出されるような感覚。あっと思った時には、ゴロン、と体が転がっていた。

何しやがる！　と思わず怒鳴りながら、体勢を整え警戒する。

何事だ。いや、ここは何処だ。何故俺はこんなところにいる？

見たことのない場所である。屋根があつて、足の下は板とも土の地面とも違う感触がする。

「あれま、ぼっちゃま。お籠ひつくり返されて」

年増の女が、柵が寝かされていた籠を元に戻した。

「だあ」

赤子の声がしたと思うと、再びむんずと顔の毛を掴まれた。これが万力のようにぎっちり握られて、わずかでも抵抗すれば毛が耨られてしまいそうだ。

髭ごとにぎり込まれたせいで、足や手で蹴ったり殴ったりと抵抗を試みるが、やはり手を離さない。それどころか、年増の女が暴れないようにと柵の体を押さえ込んで

しまう。

——傷をつけられたくねえってか。なら離しやがれ！

そう思うが、掴まれている毛が痛くて、体を捻るのもままならない。

——エエ、忌々しい！

あっちの脚で蹴ったり、こっちの手で叩いたりしてみるのが、人の赤子も女も全く意に介していなかった。むしろ、当たっている気もしない。ただ柶が一人でジタバタしているだけだ。

それを見て、赤子と女が嬉しそうに笑い声をあげる。一番閉口したのは、赤子が耳元で、きゃあきゃああと甲高い声を上げることだった。

シャー！ と威嚇の声を出し、無理矢理にでも人の手から逃げ出そうとするが、腰から上を捻ったところで、肋がズキンと痛んだ。

その痛みにも驚いて、体をまた捻ってしまう。痛くて動いて、また痛みを覚える悪循環だ。

「コレコレ、大人しくするべい。オマエ、随分と怪我をしたもんで。余計にひどくなるべい」

女が言う。赤子は相変わらず髭ごと顔の毛を掴んだまま、だあ、と嬉しそうに言った。

「ケガだと…?」

そう言って、ふと自分がなぜ意識を失ったのかを思い出す。

「あんの、化けギツネ…!」

そうだ。神使だと言う、いけ好かない白狐にコテンパンにされたのだ。

「オヤオヤ、化けギツネなどと偽りを申されては困ります。聞いた者が誤解するではありませぬか」

空の耳に、嫌味な声が聞こえて来る。

「くそつ。声まで聞こえらア。いまましい」

ケツ、と吐き捨てるついでに、体を押さえる女の手になんとか蹴りの一つも入れてやろうと思うが、気付いてしまった痛みでままならない。

「忌々しいとは心外な。恐れ多くも稲荷神のお使いでございますぞ」

座敷の天井を見ていた空の前に、白狐がふわりと顔を寄せた。

「なっ…!」

驚いた空が飛び上がりそうに驚いた。とは言え、変わらず赤子のお守りをしている

女に押さえられていたので、傍目には脚がびくと震えたようにしか見えなかっただろ。

「怪我をしていると言うのに、元気なことでござりまするなあ」

白狐がほほほ、と笑う。

「テメエ……」

「コレコレ。あまり喋るものではござりませぬよ。猫又だと気付かれては追い出されてしまいますぞ」

「上等だ！ こちとらア生まれた時から親はいねえ、一人で生きてきたんだ。今更飼いな猫なんぞ出来るものかエ。たった今、ここで人ガタになって、大暴れしてやらアナ」
本がニヤリと笑って、ぶる、と体を振るう。が、本の身体には何も起こらない。

「？」

何度かヒトガタになろうとするが、そんな心配すらない。

「猫又になったばかりの若輩者が、そんな怪我を負った体で化けられるワケもありませんまい」

吽形は諭すように言う。が、駄々っ子を宥めるような口調のわりに、目が笑っている。

「今は大人しく体を休めることが肝要でござりまするよ」

赤子が髭から手を離れたが、今度は後ろ脚を掴む。今度ばかりは蹴ってやろうとするが、それより先にまた髭ごと顔の毛を掴まれる。

「覚えてろ」

柰は身動きが出来ぬまま、ニヤニヤとした笑みを浮かべたままの神使を睨みつけた。

「あな怖ろしや」

袖で口を隠して、狛狐は怯えたフリをした。

「随分と賑やかですね」

男の声がして、縁側から新たな気配が座敷に入ってきた。

「旦那様。ぼっちゃまは大層猫が気に入られたみてえで」

女がそう答える。これまでの柰と神使のやり取りは聞こえていなかったらしい。

「そうですか。では、家の子にするのにも問題はないようですね」

男が嬉しそうにそう言う。その言葉を聞いて、柰の背中の毛がぞわっと逆立った。

「なっ……、冗談じゃアねエ」

柰は体が痛むのも気に留めず、逃げようと捻る。が、赤子がかつちりと柰を掴み、

女が体を押さえつけているせいで、逃げることもすら出来ない。

「では、家の子だと判るように、紐をつけてあげましょう」

男が鮮やかな紐に鈴をつけたものを手に、迫ってくる。

「俺にそいつをつけるってエ？ おもしれエ。やれるもんならやってみやがれ。思い入れ噛みついてやらアナ」

空は牙を剥いた。

「おや、お腹が空きましたか？ すぐにご飯を上げましょう」

空の意図に気付いた風もなく、男はそう言うとき空の頭を撫でた。そして空があつけにとられている間にすりと首に紐を結んでしまった。

「うん、今日からお前はふくですよ。ふく」

よしよし、と男が頭を撫でる。それを見た赤子が、見よう見まねで少し乱暴に頭を撫でた。

「おやおや、撫でられただけでございまするに、早牙を抜かれたのでございまするか？」

神使は相変わらず、小馬鹿にしたような口調でニヤニヤと笑っている。

「誰が！」

「いつまでそう意地を張っていられるか、見物でございまするなあ」

はははは、と白狐は笑い声をあげながら、どこからか取り出した扇をくるりと回した。
た。

「ここに在るは、稲荷神様の思し召しでござりまする。謹んでお受けなされませ。しかし、我が主が手ずから結んだ縁とは言え、お前様にはちと勿体ないほどでございませぬなあ」

「おきやがれ。神様だか仏様だか知らねえが、手前勝手に結んだ縁を有難がれたア厚かましいにもほどがあらアナ。縁が欲しけりや、神頼みなンぞせずに無理やりにも因縁をつけてやろうわナ。要らぬ縁なら頼まれねえでもこつちから切つて捨ててやらア」

杓は今やもみくちやになりながら、威勢よくそう言う。

「人に撫でられながら啖呵を切つても、説得力はござりませぬよ。ふく殿。ほほ、愉快、愉快」

神使はそう言うと、すうと宙に浮いて、するりと掻き消えた。

「まったく。またあいつらか」

柰は皿に盛られたメシを急いで食べてしまうと、ぱっと縁側に走り出た。その向こうから、ドタドタと騒がしい足音を立てて、子供たちが走ってくる。

「ふく〜！」

男と女の子だ。ちよつと身構えるように走り寄る彼らを見る。近づいてきたら逃げらるつもりだ。だが――。

「あつ！」

年下の女の方が声を上げると、ドタン、と大きな音をさせて縁側をすつ転んだ。毎日下働きの女たちがぴかぴかに磨いているから、柰の足ならツルツルに滑るくらいだ。うわぁん、と案の定大声をあげて泣き出す。顔面をしこたまぶつけたのだろう。鼻の頭とおでこを擦りむいて、顔を真っ赤にして金切り声を上げている。かわいそうではあったが、そのうるささに流石に閉口する。

「ああ、もう。かよ、なくな」

兄が大泣きしている妹を叱りつけながら、小さい体で彼女を抱き起す。

「よしよし」

親の真似か、面倒を見ている乳母の真似か。兄が妹を抱きしめてその頭を撫でた。妹も兄に頭を撫でられて落ち着いてきたのか、ぎゅうと抱きついて、しゅんしゅんと鼻を鳴らすだけで泣き止んだようだ。

全く、人騒がせな。

柰はほつと溜め息を吐いて、濡れ縁から庭へ降りた。子供たちがふく、ふく、と呼ぶが、無視して庭の中でも一番日当たりの良い岩の上に座り目を閉じた。

稲荷神の縁とかで、ヒトに飼われる身となった柰は、あれ以来猫又としての妖力を封じられてしまった。ヒトガタに化けられない、ヒトの言葉がしゃべれない。行灯の油を舐めるワケでもなく。ただただ、猫又として、いや普通の猫として世を過ごしている。

一体どれだけの時が経っただろうか。

家の者の顔ぶれが変わり、恰好が変わり。家の中に置かれるものも随分変わった。外から聞こえる音も随分と賑やかになり、香りすらも変わった。

つたく、冗談じゃアねえぜ。

パタン、と尻尾を振る。尻尾だけがやたらと毛がふさふさしているせいで判りにくい、二又も大分長くなった。

最初の内は、反発ばかりだった。警戒し、威嚇し、人目につかないところに隠れていた。触ったり撫でたりしようとして手を出してこようものなら、引っ掻く、噛みつくのは当たり前。飼いならされて堪るかとはかりに、ヒトを目の敵にしていた。

メシなどはヒトのいない時を見計らって、急いで食べる。ヒトが来れば逃げる、の繰り返しだった。

また、傷が癒えてから何度か脱走も試みた。だが、庭の隅、塀までは行けるのに、どうしてもそこから外に出られなかった。足が竦んだとか、必ず毎日貰えるご飯、夜露を凌ぐ屋根があることに未練を抱いたわけではない。塀の下を掘っても、壁を登ろうとしても、あるいは塀の外へ差し掛かっている枝に上っても、屋敷と外の境を越えようとする、訳もなく体が動かなくなってしまう、結局断念した。

「外に出られねエじゃねえか。テメエ、何しやがった」
時々揶揄にくる白狐に噛みついたものだ。

「おやまあ？ 日々ご飯を頂けることに慣れてしまわれたのでござりまするか？

もつと粘るかと思つておりましたが、暴れん坊の杓も大したことでござりませぬなあ」
ほほほほ、とある日殊更に厭味つたらしく笑われたのが腹に据えかねて、その日は猛烈に暴れまわつた。壺だの皿だのを壊し、着物や布団の上で吐く、粗相をする。障子や襖をバリバリに破き、仏壇や神棚に上がつて、すべてを叩き落したりとやりた
い放題暴れた。

サア、追いつくなら追いつく。元は寄る辺もねえ、野良猫だ。今更飼ひ猫なんぞになつて、媚売るなア御免こうむらア。

だが、何故か誰も、杓を追い出そうとはしなかつた。

それどころか、怒鳴られもなかつた。

以降、なんど悪さをして、自分が疲れるだけだと判つて、無駄に大暴れするのがバカバカしくなつた。

構つてこようとする者を適度にあしらうだけで、大きな屋敷のあちこちで勝手気ままに過ごした。ガヤガヤとヒトが出入りする店と呼ばれていた広い板間でうろついたり、客と呼ばれたヒトに出された茶でうっかり火傷したり、羊羹を奪つて食べたりした。暗くて夏は涼しい、たくさんの方が並んでいる蔵の中でだらりとしたりもした。

庭や座敷のあちこちで好きなように寛いで、時々見かける鼠や虫を獲ったりした。見掛けたことのない男たちに飛びついて、思い入れ引つ搔いたり、噛みついたりしたことも幾度かあった。あれはなかなか暴れ甲斐があるから、もう少し頻繁にあるといい。

暫く経って、柰を拾った男を見かけなくなった後くらいから、ヒトの数え方で相当長くこの家にいることが判った。猫又であれば寿命など関係ないが、通常の猫であればこんなに生きていることはないだろう。己が猫であった時分のことを思い返しても、かなり長い。あまりに長生きで元気なものだから、そろそろ家の者が怪しむだろうと、どうなるか楽しみをしていたが、誰も何も言わない。

この家の守り神様だものね、と言われて撫でられた時は、流石に何を言っているのかと呆気にとられた。猫又である。猫も犬も妖ですら面倒を嫌って避けて通った、暴れ猫である。そんな己を、間違つても「守り神」などと呼ぶ訳がない。呆れるどころか、猫又の自分から見ても、家の者たちは明らかに能天気すぎだ。

そう。きつと彼らが余りに間抜けすぎて、柰は毒気すら抜かれてしまったのだろう。

その後、柰におかしのことが起つたのは、きつと家の者が無頓着で、間抜けで、能

天気だからだ。

ある日ふと気付くと、縁の下の真つ暗な場所で目が覚めた。寝てしまったかと陽の下に出ると、柰は若い猫になっていた。

流石に知らない猫は追い出すだろう、と半ばワクワクしながら柰は座敷に戻った。若いキジトラになった柰を見て、

「見たことがあるような気がするが、はてこの猫は？」

と首を傾げる家の者たちを尻目に、勝手知ったる座敷で、当然と言わんばかりの顔をしてのさばってやると、家の者はふくが帰ってきた、と言って受け入れたのだ。

家の者たちの顔ぶれが二回入れ替わる間に、柰はそれを三回繰り返した。が、いずれも皆疑うこともなく、歳老いた猫から若い猫に戻った柰を、当たり前のように受け入れたのだ。

ホントに、ちったアおかしいと思わねエのかエ？

フン。こんなに暢気な連中、危なっかしくていけねえや。しょうのねえ。

「ふく」

子供たちが寄ってたかって、柰を撫でくりまわす。触ってほしくない腹などを触る

うとしたときは、大分手加減して噛みついたり、手を叩き落したりする。が、それ以外は多少乱暴だろうが、やりたいようにさせている。

「おやおや。メシと撫でられる手に、牙も抜かれてござりまするか？ 暴れん坊の杓も大したことござりませぬなあ」

「うるせエな」

杓は、ニヤニヤと笑いながら宙に浮かぶ神使に悪態を吐く。

「そう言えば、最初はあなたが逃げぬように、この屋敷の周りに術を施しておいたの
でござりまするが」

「やっぱりテメエか！」

カアッ！と思わず怒鳴ると、杓を撫でていた子供たちが驚いて手を引く。

「だいじょうぶ。ふく、いい子いい子するだけだよ」

「いいこ。ふく、いいこ」

兄妹はそう言って、そっと杓を撫で始める。子供たちのせいではないのだが、妙な罪悪感に杓は子供たちの手に触れるように、ぱた、としっぽを振った。

「随分前に解いてござりまする。気付いおいでとお見受けいたしまするが、逃げる気

もなさそうでござりますなあ」

人の姿を取った白狐はふわふわと浮かんだまま、無邪気に笑う子供を見ている。

「へッ、要らぬ縁なら頼まれねえでもこっちから切って捨ててやらア」

柰は目を閉じて子供たちに撫でさせながら、フン、と鼻を鳴らした。

「さすがは稲荷神様の結んだ縁でございますなあ」

くつくつと笑うのを、柰はうるせえ、と一言言った。

—
了

0509 超 # エアブー 2021-day1-

寝床屋の無料配布

2021/05/09 刊

URL: <http://wwbtd.mods.jp/nedocoya/>

Mail: nedocoya@gmail.com

Twitter: @nedocoya4pr

ようこそお出で下さいました。
この度はお手に取っていただき有り難うございます。

これを江戸時代が舞台の時代小説としていいのか、
ちょっと悩ましい所ですが、むしろ、まだそう言った
境界が曖昧で、妖たちと地続きの世界にあった頃だと
思うので、思い切って書いてしまいました。

寝床屋は、江戸時代を中心にあんまり剣豪とかが
出てこないお話を、番頭さんことかわなをと、
丁稚こと扇坊の二人で書いております。

少しでも楽しんでいただければ幸いです。

* おねがいとおことわり *

本書について、以下の行為はご遠慮くださいますようお願いいたします。

- ・ 有償無償を問わず、本書の内容を、ご自分の作成物として一部、または全てを再配布する行為。
- ・ 本書を有償にて再配布する行為。

本書の内容は今後の頒布物に収録される場合があります。また、その際にサイトでの掲載を取りやめる場合がございますので、予めご了承くださいませ。

本書は無料配布として作成したものです。